若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

寄り道もわるくない

釧路労災病院
徳山（とくやま）　雄太（ゆうた）

名古屋市出身。慶應義塾大学理工学部機械工学科を卒業後、不動産会社勤務を経て再受験し、チェコのパラツキー大学で医学を学びました。写真は、チェコでお世話になったボクシングコーチとスパーリングパートナーとの一枚です。

はじめまして。釧路労災病院で初期研修医をしております、徳山雄太と申します。今回は釧路赤十字病院の鱧永恵先生よりご紹介をいただきました。先生とは妻の初期研修同期というご縁で知り合い、今では休日に一緒に旅行へ出かけたり、釧路湿原でカヌーをしたり、パークゴルフをしたりする仲です。

また、先生とは少し面白い縁がありまして、先生の幼少期からの親友が、偶然にも私と全く同じ『徳山雄太』という名前だったそうです。そんな偶然があるのかと驚くと同時に、とても親近感が湧きました。

さて、そんなご縁で今回このリレーエッセイを書く機会をいただいたのですが、今回は少し変わった私のこれまでについて振り返ってみたいと思います。

私は名古屋市の高校を卒業後、慶應義塾大学理工学部に進学し、機械工学科で熱流体力学の分野の研究をしていました。この頃に学んだ知識は、後にチェコで自炊生活を始めた際、パスタ作りやステーキを焼く際などに非常に役立ちました。

また、大学では体育会ボクシング部に所属しました。オリンピック出場経験のあるコーチのもと、週６日、厳しい練習に明け暮れました。個人では神奈川県チャンピオンになり、チームでは後楽園ホールで行われる関東大学２部リーグに出場。４年生の時には３試合に出場し、すべてTKO勝ちしました。

ただ、厳しかったのは練習だけではありません。体育会らしく上下関係もなかなかのもので、夏合宿では、先輩がご飯を食べ終えたことに１年生の私たちが気づかず、先輩自身にご飯のおかわりへ行かせてしまったことがありました。それが指導係の先輩に見つかり、罰として坊主にさせられたこともあります。今となっては笑い話ですが、その後の人生で経験した多少の理不尽にも耐えられたのは、この時代に鍛えられたおかげかもしれません。

卒業後は不動産会社に就職しました。学生時代からインターンとして採用に関わり、多い日には１日10人ほどの学生と１時間ずつ面接をしていました。そのまま入社し、不動産営業として働き始めたのですが、ある日ふと「医者になろう」と思い、入社２週間で退職を申し出ました。

私が採用した学生からすれば、面接であれほど熱心に会社の魅力を語っていた人間が、入社直後に辞めているのですから、さぞ驚いたと思います。

退職後は、まずチェコにある医学部進学準備コースに入りました。そこで生物、化学、物理などを英語で学び、翌年、オロモウツという都市にあるパラツキー大学医学部に入学しました。

入学後は、ドイツ、イギリス、スウェーデン、イスラエルなど、さまざまな国から来た学生と一緒に医学を学びました。日本の大学と大きく違ったのは、多くの試験が筆記ではなく口頭試験だったことです。試験問題はくじ引きで決まり、例えば100個のテーマがあれば、その中から引いたテーマについて教授の前で答え続けます。

この形式は私にとって非常にストレスでした。99個を完璧に覚えていても、唯一曖昧な１個を引けば落ちるかもしれないからです。日本では一夜漬けで試験を乗り越えることもありましたが、この方式ではなかなか通用しません。ここで初めて、自分の不真面目さと真正面から向き合うことになりました。

また、口頭試験を通して、知識そのものだけでなく、相手の質問を読み取り、分からないことがあっても落ち着いて話し、時には「分かっている顔」をして説明を続ける力を身につけました。この技術は今、あまり経験の少ない手技を患者さんの前で行う際にも役立っています。

その後、無事に大学を卒業し、日本の医師国家試験にも合格し、現在に至ります。チェコを卒業してから釧路にたどり着くまでにもいろいろとありましたが、今回は字数の関係で省略させていただきます。

研修医として働き始めてからは、上級医の先生方との知識や経験の差に圧倒される毎日です。それでも、少しでも早く追いつけるよう、日々勉強し、一つずつできることを増やしています。

また、仕事が終わった後や休日には、釧路市内のボクシングジムでトレーナーとして地域の方々と交流しながら、自分自身もトレーニングを続けています。

このように振り返ってみると、随分と寄り道の多い人生を歩んできました。ただ、その時々では関係がないように思えた経験も、今になってみると意外なところで役に立っています。これから先もどんな寄り道が待っているか分かりませんが、一つ一つの経験を楽しみながら、医師としても人としても成長していければと思います。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。